経営・情報研究 No. 7（2003）

［研究ノート］

日本語の省略現象とコミュニケーションにおける問題

山　口　律　子

Ellipsis in Japanese and Issues in Intercultural Communication

Ritsuko Yamaguchi

日本語、コミュニケーション
Japanese,communication

（原稿受領日　2002. 10. 2）

Ⅰ　はじめに

一般に日本語でのコミュニケーションは、ことばのみによって成立しているのではなく、ことばと文脈の相関によって成り立つと言われている。外山（1987）は、日本語一般のコミュニケーション・スタイルを、文脈共有度の高い者同士の間に成立するもののプロトタイプ的なものとして、「家族の会話」になぞらえている。日本語の省略の問題は、そもそも、この日本語の文脈依存の性質に端を発する問題のひとつである。

日本語母語話者に対する英語教育を考える際には、この日本語の文脈依存性が、英語においても共通してみとめられるものであるか否か、という点を考察する必要が生じてくるであろう。二つの異なる言語間での言語使用の差異の問題は、近年の第二言語習得の研究から指摘されている英語使用における日本語から英語へのプラグマティック・トランスファーの問題にかかわる論点でもあるからである。

第二言語習得におけるプラグマティック・トランスファーの問題とは、日本語でのコミュニケーション上の習慣が、英語使用の場面において「転移」されるという問題を指す。ことばの省略が日本語・英語間で共有されている特性であるか否かという問題は、今日の日本人の異文化間コミュニケーションが主に英語を共通語として使用することによって成立しているという実態を踏まえれば、コミュニケーションにおける話者と聞き手のあり方に関する日本語から英語への転移の可能性を示唆するものとして、英語教育を考える上でも大きな論点となり得る問題である。つまり、仮に、日・英語の省略現象において、統語的あるいは、（文脈解釈を含む）認知的要因が、それぞれ異なるかたちで関わっているのだとすれば、そうした相異が、日本語とそれ以外の言語を第一言語とする者の間での意思疎通の行い方に影響を及ぼす可能性があるのと考えられるのである。

しかし、どの言語においても、言語の意味は、常に具体的な文脈の中で生起するものであるから、文脈が話者と聞き手の意思疎通の行い方に影響を与えるという事実は、日本語に限ったことではないはずである。日本語に限らず、他の

どの言語においても、等しく、言語の具体的使用とその解釈の仕方には、具体的な発話状況に関する話し手・聞き手の知識が何らかの影響を及ぼしているはずである。

実際の言語使用とその意味解釈において、このような話し手・聞き手の背景知識が果たす役割の重要性は、人間共通の一般認知能力に根ざした最近の言語研究の方面において重視されてきている。言語一般の事実として、言語使用と意味解釈に文脈が深くかかわっている一例として、敬意表現を挙げることができるであろう。日本語では、大きな文脈指標のひとつである「対人関係」に配慮した「敬語」の使用が見られる。日本語においては、形態的なかたちを通じて敬意表現が表出されるわけであるが、敬語を持たない英語のような言語において敬意表現がないというわけではない。英語では、例えば、時制の変化を通じた間接表現などを用いることで、話者は聞き手と共有する文脈要因に配慮した丁寧さを表現することが可能である。すなわち、言語の使用と意味解釈における文脈依存性は、本来、日本語にのみにあてはまる事実ではない。

しかし、文脈依存性が、ある程度、異なる言語に共通する特性であるとしても、日本語と英語には、ことばの省略と省略された指示対象・内容の回復に関して文脈の果たす役割の大きさに関して大きな違いが見られるようである。具体的には、統語的な制約から省略の認められる範囲が極めて限定されている英語と比べ、日本語では文脈依存に基づく省略がきわめて広い範囲で認められていることである。そのように省略が広く行われるため、日本語でのコミュニケーションでは、発話の意味解釈上の負担を聞き手の側に負わせることになりやすいという特徴があり、このことは、後に述べるように、言語間の語用論的転移という観点から、日本人のコミュニケーション一般において、大きな問題を呈するものと考えられる。

日本語の省略が対人・異文化コミュニケーションに与える影響という点に関して、筆者が担当する英語クラスでひとりの学生が興味深い指摘をしている。その学生が自らの日常のコミュニケーションを観察したところによれば、話し手が会話のトピックをしばしば省略するために、友人同士の会話の中でも聞き手が話の内容を把握することが困難であることが多いということである。この学生が指摘する日本語における「トピック」の省略という現象は、日本語のコミュニケーション・スタイルを考える上で、特に言語類型論的な観点から見て、重要な指摘であると思われる。この点について、以下、日・英語において、それぞれ省略される範疇を具体的に考察してみたい。

Ⅱ　言語の類型と省略現象

言語類型論的には、英語が “Subject-Prominent” 言語であるのに対して、日本語は “Topic-Prominent” 言語であると言われている (Li & Thompson, 1976)。“Subject-Prominent” 言語である英語においては、主語とその行為や性質を述べるというかたちで文が構成されるが、“Topic-Prominent” 言語であると言われている日本語では、トピックとそれに対するコメントを加えるというかたちで文が構成されるという言語のタイプとしての違いがある。この類型的相異から、英語においては、文の主語の省略は、統語上、許されないが、日本語では、いわゆる「主語なし文」とよばれる文の使用がごく一般的であることがよく知られている。

しかし、実際に日本語で省略の対象となるのは主語に限ったことではない。目的語の省略をはじめとする、その他様々な文の構成要素が日本語では頻繁に省略されている。一方、統語的

な制約のきつい英語においては主語や目的語を省略することは出来ず、省略が適用される範囲は極めて限定されている。　一例として、以下の日・英語の省略の事例を比較・対照してみたい。

（1）A：あなたは、あの番組を、ご覧になりましたか。
　　B：はい、[わたしは] [あの番組を（＝直接目的語）]　見ました。

（2）A：Did you see the program?
　　B：Yes, I did [＝ see the program （＝動詞句）].

（1）と（2）は、それぞれ、Aの疑問文の答えに対するBの返答文における省略を示している。Bの答えにおいて省略されている部分は、Aの疑問文において一度、談話文脈上に提示されている要素（一度文脈上に提示されている要素は、情報の重要度が文中の他の要素と比べて低いものと考えられる）を省略している事例である。言語を問わず、省略という現象には、文中の要素間の情報の重要度という尺度が関わっているらしいということが、久野（1978）の「省略順序の制約」によって指摘されている。（1）と（2）により明らかなことは、日本語においては、主語とともに他動詞の直接目的語が、英語においては、代動詞didによる置き換えによる動詞句の省略が行われていることである。前にも述べたとおり、英語は統語上の規制が強く、主語や目的語を省略することはできない。省略が許されるのは、一度、その場の談話文脈にのぼった要素のうち、特に他動詞とその補語（動詞句）に限られる。これに対して、日本語では、動詞をその直接目的語とともに（動詞句として）省略することは出来ず、動詞はいかなるときにも省略することができない。この違いは、英語には、談話の結束性を維持する代動詞“ did ”が存在することに由来するものである。

（1）（2）は、一度その場の談話文脈にのぼったトピックの省略の用例であったが、その場の談話文脈上にまだ上っていない要素の省略現象を考慮に入れると、更に興味深い、日・英語の省略現象の相違点が明らかになる。

（3）昨日、　[わたし（は）]　[あの番組を]　見たよ。

（4）I [saw the program]　yesterday.

上の（3）（4）は、ごく親しい友人同士の会話例である。[ ]にくくられた部分は、前日、会話の話題（トピック）として話されたものが、翌日、再び会話の話題として挙げられたものであるという意味で、その場の談話文脈上にまだ上っていない要素の省略の事例として示したものである。前に挙げた（1）（2）と同様、日本語文（3）では主語とともに他動詞の直接目的語が、英語の例文（4）では、動詞句が、省略の対象として [ ] によりマークされている。当然のことながら、英語文（4）では、動詞句を省略することはできない。しかし、日本語の（3）については省略が可能である。

Ⅲ　省略の文法性

筆者が非公式に行った日本語母語話者の省略に関するプレ・アンケート調査によれば、日本人母語話者の回答者のうちの大多数が、（3）のような文の文法性を認めている（日本語の語感として、不自然ではないと感じている）。

基本的に、（1）（2）と（3）（4）の対照における相違は、省略の対象となっている主語・目的語（日本語）と、動詞句（英語）が、その場の談話の文脈上にすでに上ったものであるか・否かの相違であった。英語文では、（2）のように対象となる動詞句が、対話者間でその場の談話

のトピック（旧情報）としてすでに認識されている時にのみ省略されることが分かる。一方、日本語においては、例え、時間的に一度分断された対話（間に時間的な経過がある）であっても、一度、対話者間で共有されたことのあるトピックであれば、あたかも同じ談話の延長上であるかのように、後の談話においても、相互に了解されたものとして省略され得るということを示している。また、省略されたトピックが比較的近い過去から回復可能であるものほど、そのトピックの省略は容認されやすいという結果も同じプレアンケートの結果から得られている。つまり、日本語の省略には、統語的な制約とは別に、「時間軸」という文脈要因が英語とは異なるかたちで深く関与していると考えられるのである。

先に触れたアンケートからは、(3) のような省略を可能にする具体的な文脈要因として、「対人関係」の要素も関係していることが判明した。つまり、大方の日本語母語話者の語感としては、(3) のような省略は、通常、話し手と聞き手の関係が親しいときにのみ許されるものであり、話し手にとって聞き手が親しくない・あるいは目上である場合にはこうした省略は許されないと感じているということである。「対人関係」は、日本語においては、大きな文脈指標であり、省略現象に関しても大きな影響を及ぼしていることが分かる。

これらの調査結果は、英語の省略の大方が統語的に説明されえるのと比べ、日本語の省略現象は統語のみでは十分な説明が困難であり、さらに広い視点からの省略の説明がなされなければならないことを示唆していると思われる。調査結果のうち、特に重要だと思われることは、日本語の省略が時間軸による影響を受けるものであるようだという点である。このことは、日本語の省略・日本語の文脈依存性の問題には、「記憶」という一般認知能力から切り離しては説明できない側面があるのではないかということを示唆しており、今後、これらの問題が、英語の問題とは異なり、広く意味論的にあるいは人間の一般的認知能力を視野に入れたアプローチからなされなければならないであろうことを示しているように思われる。

以上の議論の基にしてきた調査結果は、非公式に行われた日本語母語話者の語感調査から得られたもので、正確な数値化をする段階には至っていない。しかし、目的語の省略に関する文法性の判断は、母語話者間に一般的に共有される知識であり、この調査の結果得られた大まかな傾向は、広く日本語ネーティブに適用され得る結果であると考えている。また、この調査を通じて掴むことができた大まかな傾向とは、これまでも一般論として、度々、日本語の特徴として挙げられてきた文脈依存性を裏付けるものであった。

Ⅳ　言語的省略と異文化間コミュニケーション

一方、ここで視点を変えて、このような文脈依存性の高い日本語の特質は、日本人が、対話者間の社会的親疎関係や時間軸が省略に影響しない言語である英語を国際語として使用する場面でのコミュニケーション上にどのような影響を与え得るであろうか。筆者の個人的な考えによれば、最も深刻な問題として考えられることは、日本人が英語の組み立てにおいて主語や目的語の省略といった文字通りの言語間トランスファーを引き起こすかどうかという問題よりも、むしろ、省略が広く許容される母語の使用から派生する、発話の意味解釈を聞き手に大きく依存させる日本人母語話者一般のコミュニケーションのあり方が、異文化間コミュニケーションにおいて引き起こすかもしれない「説明不足」や「話の分かりにくさ」の問題にあるように思

われる。

上に論じてきた日本語の特徴とともに、筆者の英語クラスの学生から指摘された日本語のトピック省略にまつわる問題点からも明らかなように、談話トピックの省略から生ずるコミュニケーションの問題は、日本語を通じたコミュニケーションから発生する問題であり、本来その意味で、英語を通じた異文化コミュニケーションの場面に限られたことではないのかもしれない。現代の日本においては、異なる背景を持つ人々との交流も多く、例え日本語を母語として共有する者同士の交流であっても、その本質は、異文化交流である。省略された指示対象や話の内容・意図等を適切に理解するためには、話者の側で話者と文脈を共有することが必須である。もし、そうしたコミュニケーションの前提が満たされないのであれば、例え日本語を母語として共有する者の間であっても、聞き手の側に過度な認知的負担を負わせることから発生するコミュニケーションの障害は避けられない問題であろう。

一方、日本人にとって国際語としての英語は、常に不特定多数の言語的・文化的背景を持った人々とのコミュニケーションを前提としている。このため、省略を広く許容する日本語の特質、もしくは、日本人の省略許容的なコミュニケーションのスタイルをそのまま異言語・異文化間コミュニケーションの場に持ち込んだ場合のコミュニケーションへのダメージは、想像に難くはないであろう。

本稿では、主に、日本語の文脈依存性の特質と省略現象を、英語使用と異文化コミュニケーションの問題との関連において論じてきた。語学教育の研究においては、学習者の母語の干渉は常に大きな問題であった。今後は、ますます、具体的な語用に関する研究の重要性が高まるものと思われる。英語教育におけるコミュニケーション上のトランスファーの問題に対する方策を探る試みとして、今後は、比較統語的視点に加え、意味論的、あるいは広く認知的な視点をも含んだ言語的アプローチから、日本語・英語の省略現象の説明とコミュニケーションにおける省略の影響についての研究を進めてゆきたい。

参考文献

（1）久野　暲　『談話の文法』東京：大修館書店.1978.

（2）Li, N. C. & Thompson, S. A. “ Subject and topic: A new typology of language. ” In Li, C. N. (ed.) *Subject and topic*. New York: Academic Press. pp. 457-489.1976.

（3）外山滋比古.『日本語の論理』東京：中央公論社 1987.

著者プロフィール

山口　律子

青山学院大学卒（1989 年）、ファースト・シカゴ銀行勤務後、Eastern Michigan University 大学院（TESOL）卒（2000 年）、現在、多摩大学 English Shower Program 非常勤講師